「戦争と平和！」
第 19 回

“抑止力”で平和は創れない

中原 幹男

《誰が得しているのか》

米軍の無人爆撃機がイラン革命防衛隊の司令官を空爆して殺した。正月早々世界中に衝撃が走った。さらに報復の応酬が拡大していくのか。イランの何十万人もの群衆が集まり、「アメリカへ死を！」と叫ぶ司令官葬儀シーンがテレビで流れている。世界中が固唾をのんで見ている。

ソレイマニ司令官葬儀
AP 通信　2020 年 1 月 6 日

話は変わるが、アジア研究会のミニ講演会で、第 2 次大戦前、アメリカが旧ソ連にも大量の兵器を売却していたことを知った。ソ連はその兵器でドイツと戦った。戦後は、核兵器を互いに大量に製造し冷戦構造が続いた。その間、朝鮮戦争やベトナム戦争、中東戦争、イラン・イラク戦争、アフガニスタン戦争など枚挙に暇がないほど戦争が起こっている。そのほとんどに旧ソ連、ロシアとアメリカがかかわっている。
それらの戦場で使われている兵器は、アメリカ製と旧ソ連製、ロシア製が主流であろう。だれが得をしているのか、武器をつくり売る人間である。

《軍隊はなぜ必要か》

国はなぜ軍隊を持つのか。“専守防衛”というけれど、襲ってくる敵がいなければ軍隊は無用である。かつて工場に勤務していた時に、イスラエルの化学会社の女性の技術営業が特殊プラスチックの売り込みにやってきた。ちょっとだけだが、国防について話ができた。“中東では武力が強くなければ生き残れない。反撃しなければ国がつぶれる。”と言った。いつミサイルが飛んでくるかわからない。われわれ日本人にしてみると、どれだけ緊張して生活しているのか想像がつかない。

「コスタリカの奇跡」というドキュメンタリー上映会があった。中央アメリカに軍隊を放棄した「コスタリカ」という国がある。1948 年軍事政権が軍隊を放棄し、その予算を福祉や教育に回したのである。何十年も平和が続いていて、2016 年の「地球幸福度指数」世界一の国である。

《抑止力で戦争を防げるのか》

“抑止力”という言葉がある。＜敵に甚大な損害を与える武力を保有していることを示し、相手に武力行使を思いとどまらせる＞というのが“抑止力”である。核兵器を保有している国や核兵器を持とうとする国、また、アメリカの「核の傘」に守られていると思っている日本政府もこの論を支持している。しかし、前述のように、相手が核を持っていようがいまいが、世界中で地域的な戦争は終わりなく続いている。武器を持っている限り、報復の連鎖は止まらない。そして、“専守防衛”のためであっても抑止力論はこれで十分という終わりはなく、防衛予算の増大を招き、国際的緊張を高め、武器商人を喜ばせるだけである。

同郷の知り合いに、航空自衛隊の F15 戦闘機乗りがいた。彼は年間何百回もスクランブル発進し、追跡する相手の戦闘機は主にロシアのものだったようだ。多くを語らなかったが、毎回命を落とす覚悟で飛び立ったという。ロシアの戦闘機は何のために日本の上空まで飛んでくるのか、自衛隊の実力を試すのだろうか。ロシアの戦闘機が日本の上空を侵さなければ、命の危険を冒してまで発進する必要はないだろうに。

《仲良くするしかない》

数年前にアジア研究会で「中国は好きか嫌いか」という討論会を行った。研究会の代表が何度も中国に行ってビジュアルな報告を紹介してくれる。この国の社会整備の進化はすごい。中国相手に日本が戦争して勝てるわけがない。アジ研の討論会の結論は「仲良くするしかない」であった。

どんな小さな小競り合い的戦争でも、環境を破壊する。アジア、中東アジア、アフリカなどは、地域紛争、内戦等によって長い間環境破壊が続いている。一度破壊された環境がもとに戻るには長い年月がかかる。地球を壊してしまう戦争は一刻も早くやめ、地球を守るべきである。